第四部　聖書と教会

問41　聖書とはどんな書物ですか。

答　イエス・キリストを中心とした神のみわざをのべ伝えている書物で、旧約聖書と新約聖書とからなっております。これは、約三千年あるいは二千年も前に書かれた古い書物ですが、イスラエルの予言者や、イエスの弟子たちが聖霊に導かれて書いたものですから、宗教改革者ルターが「聖書は、イエス・キリストが宿っている馬槽（うまぶね）である」といったように、そこには、永遠の救主イエス・キリストが宿っておられるといえるのです。このキリストは、聖書のことばを通して、現代のわたしたちに語りかけ、ご自分を啓示し、救いをあたえられます。ですから聖書は現代の生きた神のことばであります。

教会は、この聖書を経典として、他のすべての書物から区別し、信仰と生活との唯一のあやまりない規範としておるのです。（ヨハネ五・三九、テモテ第二、三・一五―一七）

問42　なぜ新約聖書だけではいけませんか。

答　神の御子イエス・キリストは、今から約二千年前、何の前ぶれもなしに、突然ユダヤにあらわれたのではありません。そこには、千年以上にも及ぶ、長い準備の歴史があったのです。そこでは神がイスラエル民族を通して、人類を救うための契約（約束）を結ばれました。その記録が旧約聖書であります。新約聖書はイエス・キリストがこの契約の成就であることの証言なのです。ですから、キリストを正しく知るためには、新約聖書だけではなく、旧約聖書をも読まなくてはなりません。

一般に旧約聖書は新約聖書にくらべて、あまりよく読まれていないようですし、なかには旧約聖書を軽視したり、無視したりする人がいますが、それではキリストの理解がかたより、ふじゅうぶんになるばかりでなく、神のなされたことを人間の判断で勝手に選択することであって、大きなあやまりであります。もちろん旧約聖書は独立したものではなく、新約聖書の光に照らして、はじめて正しく理解されるものであります。両者は決して分離することができないものです。

問43　聖書をよんでも、ちょっとわかりにくいのですが、どうしたらよいのでしょうか。

答　聖書は一般の科学書や文学書とはちがって、神の御業を記した信仰の書であります。ですから、理性的には理解できない点もあるのです。また聖書の書かれた時代や風俗は、現代のわたしたちと離れているために、じゅうぶんにわからないところもあるわけです。しかし、わからないといってそこでやめてしまわず、ずっと読みつづけることによって、時と所をこえてわたしたちの心に語りかける神の声をきくことができるのです。

そして、このためには、ひとりで聖書をよんでいるだけでなく、教会に行って聖書の話をきかなければなりません。教会では、たえず現代における生きた神のことばをきこうとして、聖書の研究がなされ、説教がなされています。聖書を正しく知るためには、教会の指導を受けることがたいせつです。

問44　聖書のなかには、数多くの奇跡がありますが、科学的には信じられないと思います。どう受け取ったらよいでしょうか。

答　聖書の奇跡には、だいたい次の二つのうけとりかたがあります。

その一つは、それらの奇跡がほんとうに起こった出来事であると、そのまま受けいれる態度です。もう一つは、弟子たちに示された神の真理を言いあらわすために、そのような奇跡物語が生まれたと解釈するものです。（また、この二つをあわせて、科学的にも起こりうると認められる奇跡はうけいれ、そうでないものは作り話とする考えかたもあります。）

第二の解釈は、現代的でうけいれやすいように思われますが、そこにも大きな問題があります。たとえば、奇跡が実際にあったのではなく、ただ弟子たちの心の中だけに起こったことであるとするならば、神の真理といってもいっさいは人間が考え出したものに過ぎなくなり、ひとりよがりといわれてもしかたがありません。それでは救いとか信仰というものは、各人各様主観的なものになり、イエス・キリストによる救いということも無意味になります。

いったい、わたしたちの救いの確かさと信仰の根拠とは、神の子イエス・キリストの十字架の死（**問25**）と復活（**問26**）という事実にあるのです。この出来事は、歴史の中に実際に起こったことでありますが、それは、神が直接手をくだされた啓示の出来事であり、人間の理性や科学の力ではとらえられず、ただ信仰によってのみ、うけいれることのできる秘義的な出来事なのです。処女降誕もまた、そうした出来事だったのです。

このような神の奇跡は、すべての人にあたえられた神の愛と力のあらわれであり、そのよう

な科学の及ばない領域にまで心を開き、信仰によって、神のみ業をうけいれることがたいせつであります。

問45　教会とは何ですか。

答　教会とは、神によって選ばれて、キリストのもとに召し集められた団体であり、民族や国家、あるいは階級やイデオロギーによる共同体など、また、趣味による団体などと異なって、信仰による霊的共同体であります。

また、教会は、人間が作ったものでなく、神が造られた新しい群れであって、やがて到来する神の国につらなっている交わりであります。

ここに集まっている者は、この世的ないっさいの差別をこえて、神の子とされ、兄弟姉妹とされた者たちですが、まだ救いは完全に成就されていませんから、教会はいろいろの欠点や破れ目ももっております。しかし、キリストはかしらとして、この教会の交わりの中に存在しておられ、忍耐と愛をもって信じる者を養い育て、この教会を通して、この世に向かって働きかけられるのです。その故に教会は、「キリストのからだ」とよばれます。

神は教会を造って、信じる者をつぎつぎにこの交わりの中に加えられるのであって、教会を離れて、神とともに生きることはできません。宗教改革者カルヴァンが「教会を母としてもたない者は、神を父としてもつことができない」と言ったのは、この意味であります。

わたしたちは、この教会の中で、育てられ、神に仕え、信仰と、希望と、愛に生きるのであります。（ガラテヤ三・二六―二八、エペソ一・二二―二三、四・一五―一六）

問46 教会では毎日曜日、礼拝が行なわれていますが、礼拝とは何ですか。

答 みんなが一箇所に集まって、いっしょに神を礼拝することで、これは、信仰生活の中心であります。そして礼拝するとは、語られる神のことばをきくということであります。

よく、お宮におがみにいくとか、お寺におまいりにいくとかいいますが、教会には、神のことばをききにいくのです。

礼拝式では、聖書に基づく説教、聖礼典を中心にして、その前後に、讃美歌、祈禱、献金、などがなされていますが、わたしたちは、このきよめられた厳粛な礼拝式の中で、ただそのふんいきにばくぜんとひたるのではなく、神が今、自分に何を語り、何を教え、何をあたえ、何

を求めておられるかを知り、それによって自ら養われ、生命と力とを与えられるのです。そして、神への新しい決意をささげ、神との交わりを経験し、神の栄光をあらわすのであります。

こうして、霊的な魂の養いを豊かに受けることは、一週間の生活の源泉となるのです。もし、これを日曜日ごとに受けていないなら、わたしたちは霊的生命を失い、形ばかりの信者になってしまうのです。（ヨハネ四・二三―二四）

問47 ひとりで神を礼拝してもよくはありませんか。どうしても教会の礼拝に出なくてはなりませんか。

答 たしかにひとりで聖書をよみ、信仰書を読み、祈りをすることによって、礼拝をすることができます。そのような、密室における神との交わりは、たいへん必要であります。

しかし、神は、わたしの神であるだけでなく、わたしたちの神であり、密室で礼拝されるだけでなく、公共の場所でいっしょに礼拝され、「天にます、われらの父よ」と呼ばれ、いっしょに同じ神のことばがきかれることを欲しておられるのです。それは、神は単に個人を個人として救い、神の子とされるのではなく、そのひとびとを集めて一つの共同体を形成しよう

と望んでおられるからです。

わたしたちは、教会の公けの礼拝に参加することにより、われわれが神の民であることを体験し、またそのように訓練されるのです。このため、どうしても教会の礼拝に出なくてはなりません。

もちろん、教会の礼拝には、いろいろ不完全なところや、時にはものたりぬこともありましょう。ひとりで礼拝しているほうが、よく神を礼拝できると思えることもありましょう。しかし、そのために教会の礼拝に出ないということは、もっともなようですが、その実は自己満足におちいることであって、ついには、いんとん的になったり、あるいはひじょうに主観的になって、正しくありません。教会のつまずきはこえてゆかねばなりません。

こうして、公同の礼拝に喜びを見出すようでなくては、真の信仰とはいえないでしょう。そうして、わたしたちは、神との交わりを通して、ほんとうにひとびととの交わりを与えられるのであります。（マタイ一八・二〇、ヨハネ一七・二一―二二、ヘブル一〇・二五、ヨハネ第一、一・三）

問48　礼拝では、必ず説教というものがなされていますが、なぜですか。

答　前二問で答えましたように、礼拝とは、神のことばをきき、それによって養われることであります。そして、その神のことばは、特に聖書に基づく説教によって伝えられるのです。

説教とは、牧師が聖書のことばによって、イエス・キリストをあかしし、神がその聖言（みことば）を通して、今日にも語りかけておられることを伝えることですが、実はこのような牧師の説教を通して、聖霊が働いて、神ご自身が聴衆のひとりひとりに向かって、直接語りかけられるというできごとが起こるのです。ですから、説教は神のことばといえるのです。これをきく者は、「しもべはききます。主よ、語って下さい」という態度でのぞまねばなりません。

このようなわけですから、説教は、礼拝式の中の単なる一部ではなく、その中心であります。

わたしたちは、説教を一番重んじなければなりません。（テサロニケ第一、二・一三、コリント第一、三・一―五）

問49　洗礼はどうしても受けねばなりませんか。

答　洗礼とは、わたしたちがキリストと結ばれ、罪をゆるされて、キリストのからだである教

会にうけいれられる神聖な儀式であります。洗礼の水は、罪の洗いを意味し、罪にみちた自分がキリストとともに死んで葬られ、キリストとともに新しくよみがえる、霊的新生を象徴しています（ローマ六・三―六）

罪のゆるしやキリストとのつながりということは、霊的なことであるから、なにも洗礼というしるしや形式は必要ではないというひとびとがあります。それには一理あるように思われます。しかし、その人たちは、神とのつながりが単に精神的なものであるだけでなく、身体的なものも含む全存在的なものであることを忘れており、また、人間の信仰がどんなに弱いものであるかということも知らないうぬぼれた人といわねばなりません。もし、わたしたちが、天使のように完全な霊的存在であるならば、目に見えるしるしなどなくても、キリストに結びつくことを確信できるでしょう。しかし、わたしたちは肉体をもっており、しばしば霊的な事実が確信できなくなるのです。そこで神は、象徴を用いて、わたしたちを助け、わたしたちが確かにキリストの死と復活の救いにあずかっていることを確信させようとされたのです。事実、霊的不安の中で、自分が洗礼を受けているということが、どれほどの力となり、支えとなるかは、はかりしれないものがあります。

このようなわけですから、しるしを必要としないと考えて、勝手に洗礼をこばむ人はだれでも神の深い恵みを拒否することになり、ごうまんといわねばなりません。

また、洗礼をうけることによって、神の恵みにより、キリストの弟子のひとりとして加えられるのであります。それによってわたしたちは、だれの前でも、キリストのしもべであり、教会の一員であることを告白するのです。人生にはすべてこうしたけじめがたいせつであります。それをしないでひそかな内縁関係のように、キリストとつながるというのはまちがいであります。

ですから、もし、あなたがイエス・キリストを救主と信じるならば、ただちに洗礼を受けるべきであります。

また、わたしたちは、洗礼を受けることを転機として、クリスチャンとしての自覚を明らかにし、神の栄光のための働きに参加してゆくのです。この意味でも洗礼は大事な儀式であります。（ヨハネ三・五、ローマ一〇・九―一〇、コリント第一、一二・二七）

問50 信者になりたいと思うのですが、まだじゅうぶんにわかっていません。洗礼を受けるのに必要な条件は何でしょうか。

答 自分が罪深く、力弱いものであることを認め、悔改めてキリストによって救われることを

信じるすなおな心です。これ以上のことは、まだじゅうぶんに知らず、体験していなくても、これからだんだんに学び、高められ深められていけばよいのです。洗礼は、いわばゴールではなく、スタートです。卒業式ではなく入学式です。これから教会の指導を受け、よい信者として成長していくことがたいせつです。

よく「わたしはまだだめです。洗礼を受ける資格がない」という人がいますが、どういうことを資格と考えているのかが問題であります。もし、その人がある程度の信仰と知識をもちえたという自己評価を資格と考えているならば、まったくあやまっているといわねばなりません。信仰とは、自分で満足できるような自己評価に立脚するのでなく、ただ神の恵みの判断にまかせきることです。自信と信仰とは、まるで反対のものであります。自信にたよらず、うち砕かれた信仰をもって洗礼を受けましょう。

ともかく、洗礼ということを示されたら、ひとりで考えていないで、牧師か信者のかたに打ち明けて相談し、指導してもらうことが一番よいことです。（使徒二・三八、テトス三・五―六）

問51　礼拝の中でときどき、ほんの少量のパンとぶどう酒をいただく儀式がありますが、あれはどういう意味ですか。

答　聖餐式といいます。これは洗礼式とともに、主イエスが教会にのこしてゆかれた二つの聖礼典（サクラメント）の一つで、洗礼を受けた者だけが（小児洗礼を受けた人は、信仰告白をしてから）受けるものです。

パンは、キリストのさかれたからだを象徴し、ぶどう酒は、流された血を象徴しています。この二つのものをいただくということは、それによって、わたしたちがキリストの十字架の救いにあずかっているという霊的な事実をふたたび確証され、新しく霊的生命を受けるためであります。

また、聖餐の食卓は、神の国において、神がすべての信じる者たちを一つの食卓に召し集めて、饗宴を開かれる御国の交わりを象徴しております。わたしたちは聖餐の食卓に相つどうことによって、このような永遠のみ国の兄弟姉妹であることをおぼえるのです。（コリント第一、一〇・一六―一七、一一・二三―二九、一二・一三―一四）

なお、カトリック教会では、この聖餐式をミサといい、パンが司祭のことばによってキリストのからだに変化し、それを犠牲として祭壇にささげ、その後聖体拝領といって各信者がいた

だく儀式をおこなっています。しかし、パンをキリストとしてたてまつり、ご聖体と称して食するというようなことは、よく神社などからいただく水や酒や餅などに、特別な効験やごりやくがあるかのように考えるのと同じく、迷信であり、まちがいであります。

パンはパンであって、キリストの分身ではありません。しかし、聖霊の働きによってパンはパンのままで、霊的生命を伝達する道具として用いられるのです。ですから、わたしたちは、二つの品がさし示しているものを正しくみつめる信仰をもって、聖餐式にあずからねばなりません。信仰なしに、これを受けることは無意味であるだけでなく、主の恵みをむなしくする罪であります。

問52　信仰告白とは何ですか。

答　信仰告白とは、のべ伝えられた神の言に対する教会の応答であり、讃美であります。そこには教会が、拠って立つ信仰の立場が明確にあらわされています。

信仰告白は決して強制されてするものではなく、自由に、自発的に、神の恵みに応えてするものです。自発性こそ、わたしたちの信仰の真の姿であります。

自由な、自発的な告白には、同時に責任が伴うのは当然です。昔から、信仰告白が命がけで守られてきたのはそのためであります。

わたしたちが神を信じて生きるとは、教会に連なり、その教会の信仰告白に、主体的に参与するものとして生きることであります。

問53 教会は聖書の他に、なんのために信仰告白を必要としているのでしょうか。

答 聖書は、聖霊がわたしたち教会に与えられた神の言であるのに対して、信仰告白とは、その神の言に対するわたしたちの応答であると共に、間違った信仰の教師や敵の言葉に対する教会の答えです。教会は誕生の時から信仰告白をもち、それに生きてきました。この信仰告白は教会が教会として世にあるためになくてはならないものであります。

信仰告白は、常に聖書の権威のもとにあり、聖書を土壌としており、聖書によってその真偽がはかられるのであります。

問54　それでは日本基督教団の信仰告白はどんなものでしょうか。

答　それは次のとおりです。

「我らは信じかつ告白す。

旧新約聖書は、神の霊感によりて成り、キリストを証し、福音の真理を示し、教会の拠るべき唯一の正典なり。されば聖書は聖霊によりて、神につき、救ひにつきて、全き知識を我らに与ふる神の言にして、信仰と生活との誤りなき規範なり。

主イエス・キリストによりて啓示せられ、聖書において証せらるる唯一の神は、父・子・聖霊なる、三位一体の神にていましたまふ。御子は我ら罪人の救ひのために人と成り、十字架にかかり、ひとたび己を全き犠牲(いけにえ)として神にささげ、我らの贖(あがな)ひとなりたまへり。

神は恵みをもて我らを選び、ただキリストを信ずる信仰により、我らの罪を赦して義としたまふ。この変らざる恵みのうちに、聖霊は我らを潔めて義の果を結ばしめ、その御(み)業を成就したまふ。

教会は主キリストの体(からだ)にして、恵みにより召されたる者の集ひなり。教会は公の礼拝を守り、福音を正しく宣べ伝へ、バプテスマと主の晩餐との聖礼典を執り行ひ、愛のわざに励みつ

つ、主の再び来りたまふを待ち望む。

我らはかく信じ、代々の聖徒と共に、使徒信条を告白す。

我は天地の造り主、全能の父なる神を信ず。我はその独り子、我らの主、イエス・キリストを信ず。主は聖霊によりてやどり、処女マリヤより生れ、ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ、死にて葬られ、陰府にくだり、三日目に死人のうちよりよみがへり、天に昇り、全能の父なる神の右に坐したまへり。かしこより来りて、生ける者と死ねる者とを審きたまはん。我は聖霊を信ず。聖なる公同の教会、聖徒の交はり、罪の赦し、身体のよみがえり、永遠の生命を信ず。アーメン。

この信仰告白は第八回教団総会において制定されました。（一九五四年―昭和二九年―一〇月二六日）　その内容は、聖書、神、キリスト、救い、聖霊、教会、使徒信条を告白しており、簡潔であって、しかも福音主義信仰をいいあらわした信仰告白だといわれています。

（信仰告白についての解説は北森嘉蔵著「信仰告白解説」及び宮崎明治著「われらは信ず」参照）

問55　信者はお互いを兄弟姉妹とよびますが、どういう意味ですか。

答　教会は民族、階級、家、性別、思想、職業、教養、趣味などのちがいをこえて、キリストにおいて一つにされている交わりであって（ガラテヤ三。二八）、神が王である新しい民（ペテロ第一、二。九―一〇）とか、神を父とする霊的な家族（エペソ二。一八―二二）と呼び、そこから信者同志兄弟姉妹とよんでおります。

しかし、この兄弟姉妹の愛の交わりは、見える姿ではまだ不完全であるため、ときどきつまずきを起こしたりして破れ目が多く、わたしたちはときにひじょうな失望を感じることがあります。しかし、わたしたちはこのような現実の中にあって、それにもかかわらず、キリストのゆるしによって霊的に一つであり、聖なる兄弟姉妹の交わりの中にあるという永遠に変らない事実を信仰によって認め、そこにかたく立ち、それをあらわす愛の交わりへの努力をつづけてゆかなければならないのです。（ヨハネ一五。一―一七）

問56　教会はどんなふうに運営されていますか。

答　教会は地上に立てられた信仰の団体として、一つの秩序と組織をもって運営されておりま

す。

まず、教会のかしらはキリストであります。キリストは唯一の支配者であって、彼以外に何びとたりとも教会を支配することはできません。（エペソ一・二二）

洗礼をうけて教会にはいった人を信徒または教会員といい、キリストのからだのえだとして教会を形成し、さまざまの奉仕をして主なるキリストに仕えています。教職は信徒の中から特別に神の召しをうけ、一定の訓練をうけて按手礼または准允をうけた者で牧師または伝道師として教会につかわされた人であります。教会は毎年全会員によって総会が行なわれ、役員の選挙、伝道計画、予算決算の報告決定、その他重要な事項を取り扱い、その後運営を役員会にゆだねます。

役員は信徒のうちから選ばれ、教職を助けて、教会の礼拝、伝道、牧会、奉仕などいっさいの運営に責任を負います。このほか、教会には、年令、性別、職業、地域などに応じたグループがあり、それぞれ活動しております。また教会の財政的運営はすべて信徒の献金によってなされています。

しかし、弱い教会の場合は、強い教会からささげられた献金によって援助をうける場合もあります。

また、教会は各地に立てられ、それぞれ独立して運営されていますが、同時に日本基督教団

という全体教会に包括され、十五の教区（たとえば岡山県と鳥取県とで東中国教区を作っている）を作って地域的に共同しております。

さらにまた、教団、教派をこえて、他の教派の教会とも交わりをもち（たとえば日本基督教協議会―ＮＣＣ）、さらには、全世界の教会とも連携して助けあっております。（たとえば世界教会協議会―ＷＣＣ）（コリント第一、一二・四―三一、エペソ四・一一―一六）

問57　教会にもいろいろの教派があるようですが、なぜ分かれているのでしょうか。

答　この世にキリストの教会はただ一つしかありません。この一つなる教会が、いくつかの教派に分かれて活躍しているのです。日本でも、日本基督教団、日本聖公会、日本福音ルーテル教会、日本改革派教会、日本バプテスト連盟、日本基督教会、日本イエス・キリスト教団、日本福音教団、ローマ・カトリック教会、日本正教会、その他数多くの教派があります。

教派が生まれたのは、いろいろな歴史的、教理的理由によるのであって、いちがいに否定できません。同じ神を信じ、キリストを信じているのですが、ただ、その一つなる信仰の強調点にちがいがあるわけで、おのおのちがった強調点を見出しているということは、キリスト教の

多様性と豊かさを示すものであります。ただその強調点の相違のために、本質的な一致点を見失うことがあるとすれば、それは大きなあやまりです。

今日では各教派は互いに他を尊重し、協力関係をもち、できることなら合同しようという世界教会運動（エキュメニズム）や教会合同運動が盛んであります。最近はロシア正教会までも世界基督教協議会（WCC）に正式加入しましたし、ローマ・カトリック教会でさえひじょうな関心をもって歩みよっております。

問58　カトリック教会とプロテスタントの福音主義教会とは、どうちがいますか。

答　ローマ・カトリック教会も一つの教派であります。カトリック教会の教義の中心で、わたしたち福音主義教会と根本的に違う点は（他にもいろいろありますが）、人はその功績によって救われるということと、法王（教皇）の無謬性を認めているということです。前者は神の無償の恵みを否定し（**問30**参照）、後者はキリストの唯一の主権を犯しています。

わたしたちはカトリック教会のように、法王（教皇）を頂点とする教会の権威と伝承の上に立つのではなく、神の言である聖書の権威の上に立っています。ですからこのような教えは、

聖書の教えに反すると考えますので、どうしてもうけ入れることができません。もし、カトリック教会が人間の救われるのは、まったく神の恵みによるといって神に栄光を帰し、法王もその働きにおいて謬りうることを認めて、ともに栄光の主なるキリストを仰ぐのでしたら、他の点でどんなに相違していても、一つになることができます。しかしそうでない限りは、わたしたちは真理を守るために、彼らに対しては否をいわねばならないのです。

しかし、教義上の誤りはあっても、わたしたちは彼らをやはりキリストの教会として認めます。キリストは彼らの中にもおられます。ですからわたしたちは、根気強く、真実の一致に向かって努力を払わねばなりません。

問59 無教会主義というものがありますが、なぜいけないのでしょうか。

答 無教会主義とは、福音の精神的な面だけを重んじて具体的な面を軽んじ、あるいは否定する考えで、無教会の人びとは、教会の制度、組織、聖礼典などは、信仰を形式化し固定化して生命を失わせるというのです。

無教会の人びとが信仰による救いを強調し、聖書研究に熱心であることは正しいことです。

しかし、教会の制度や秩序、洗礼、聖餐を認めないということは、キリストが肉体をとってこられたということを正しくうけとめていない一種の精神主義、個人主義であります。内容を失って形式化してしまうことは堕落でありますが、だから形式はいらないと形式のない内容を考えることも、ちょうど肉体のない精神を考えるのと同じように抽象化、観念化といわねばなりません。

無教会主義は、教会という公の秩序を認めないため、結局ひとりよがりの個人主義、英雄主義におちいり、ひいては指導者を中心として割拠する結果となります。

もちろん、目に見える形式、組織には、たえずさまざまな問題がつきまといます。しかし、わたしたちはその中で形式化をさけながら、生命を保つというきびしい道を歩んでいかねばならないのです。（ヨハネ第一、四・二）

問60　教会はこの世に対してどんな使命をもっていますか。

答　三つの使命をもっております。その第一は伝道です。この世はまことの神を知らず、救いの希望をもっておりません。教会はまずこのような世に向かって、唯一の神とキリストの恵み

を知らせ、ひとびとを救いに導き、教会に導かねばなりません。

第二はこの世に愛の実践をして奉仕してゆくことです。主イエスが、仕えられるためではなく仕えるためにこられたように、教会はこの世の失われた人間関係の回復のために、愛の奉仕をしてゆかねばなりません。

第三にこの世の政治、社会の動きに対し、たえず正義の見張人として見守り、神のみこころに反する場合はそれを指摘し、予言者のような役割を果たさねばなりません。このようにこの世は神の支配下にありながらまだ神を知らず、神に逆らっていますから、教会はこの世の救いのために祈り努力せねばならないのです。

教会はこれら三つの使命を果たし、この世に対し神の証しを立てることの中に生きた生命をもちうるのであって、この使命を果たさずに自己保存のためにあけくれるといったことであれば、教会は生命を失い、死んだ教会となってしまうでしょう。

こういうわけですから、教会のえだである各信徒は、おのおのの生活の場でこの三つの使命達成に努めねばなりません。（マタイ二八・一九、ルカ一〇・三七など）

問61　教会での信徒のつとめは何ですか。

答　まず教会の集会を重んじ、みことばに豊かに養われていることです。集会に出なくなることは、自分を霊的に枯渇させ、名ばかりの信者にして生命を失わせてしまいます。

次に信徒の交わりを重んじ、キリストを中心とする兄弟姉妹の愛の交わりの実現に努力せねばなりません。

そして次に、教会のあの三つの使命（伝道、奉仕、予言者的活動）に、おのおのの たまもの、能力に応じて参加し、社会において力強い信仰の証しをなすとともに、さらに教会の維持発展のために財をささげて、教会がじゅうぶん働きができるように努めねばなりません。

このように、信徒はキリストのからだである教会を愛し、責任を感じ、たえず教会のことに思いをはせて祈っていなくてはならないのです。（ヨハネ一五・一―八、ローマ一二・一―一八）

問62　なぜ献金をしますか。

答　献金は神の恵みに対する感謝の具体的な表現であり、献身のしるしであります。表現のない心の中だけの感謝は偽りであって、真実の感謝があふれるときは、必然的に自分のもっている宝をささげずにはおれないものです。（ヨハネ第一、三・一六―一八）。ですから信者は神に宝をささげます。

さて、献金ということはどの宗教でも行なわれているものです。しかし、キリスト教では、他の場合と根本的に違ったものがあります。というのは、他の宗教では、その献金によって神のお恵みを受けようという、自己中心的な精神でなされることが多いのですが、キリスト教では、反対に神の恵みを受けたことに対する感謝の応答として、さらに神の働きの進展のために、という純粋な奉仕の精神をもって、すなわち神中心的になされるということであります。

このように利己心のない、かおりのある献金をいたしましょう。（マルコ一二・四一―四四、コリント第二、八・一―五）

問63　どのくらい献金すればよいのでしょうか。

答　すべての富は神のものであり、神からわたしたちに委託されたものであります。

そこで、旧約時代には、すべて最初に与えられた初穂は必ず神にかえし、さらに全収入の十分の一をささげて、残りを自分たちのために用いました。新約時代においては、このおきては強制されませんでしたが、同じ精神をもって自由な心からささげることが求められました。

たいせつなことは、「惜しむ心からでなく、また、しいられてでもなく、自ら心で決めたとおりにする」（コリント第二、九・七）ことです。ですから、その額は、その人にあたえられた信仰と感謝と経済力とに応じて定まるものであります。

しかし、今日でも十分の一献金は、わたしたちの目標であります。実際にはそれ以上している人もありますが、感謝をもってその目標に達するよう信仰の高められることを求めましょう。

なお、献金のしかたには、礼拝献金、月定献金、伝道献金、感謝献金（受洗、誕生、入学、結婚、就職、増俸、建築、記念など）、特別献金などいろいろの種類があります。（また、教団では日本の教会と伝道の働きは、日本の信徒の手でになって行こうという祈りから、自立連帯資金という献金がなされております。）

そのつど、ふさわしくささげましょう。（出エジプト一三・一―二、レビ二七・三〇―三四使徒四・三二―三五）